

(環境) 岩津小学校 3年

学区の自然から学ぼう

5月～12月(25時間)

1 ねらい

豊かな自然に囲まれている本校の校庭は、子どもたちにとって格好の遊び場となっている。自然への関心も高く、休み時間にダンゴムシやトカゲやカブトムシの幼虫などを捕まえて、「先生、箱をください。」と言って飼育を希望する子の姿が見られた。捕まえてはみたものの、飼育する場所やえさについては、あまり考慮できていなかった。そんな中、「ダンゴムシは新聞紙も食べるよ。」「トカゲは水も飲むからカップがいるよ。」と助言する生き物博士のような子もいた。飼育活動を通して、自分本位で生き物にかかわるのではなく、生き物の習性を知った上で愛着心を育むことの重要性を学び、自ら課題を見つけ、人との交流を通して解決する力をつけていけるのではないかと考えた。

小学校中学年という発達段階を踏まえ、学区の身近な環境の変化に目を向けさせ、様々な現象や活動に出会うことで、動植物への愛着をもち、将来にわたってそれらを大切に育てたいと考えた。また、調べて分かったことを動植物に興味・関心をもって学習している下学年の子に分かりやすく伝えることで、自ら考え、行動できる力を育てていきたい。

2 研究の手立て

①身近な動植物へ愛着を持たせるために、校庭や「おかざき自然体験の森」の自然探検を行い、場所によって生き物の種類や数、地面の温度などが違うことを地図や表などにまとめる。

②生き物と自然環境とのかかわりについて具体的に調べることができるようにするために、校庭で採取しやすいダンゴムシやカブトムシを取り上げ、飼育し、観察や実験を行うようにする。

③自然を正しく認識する目が育つように、自然の調査の仕方を本やインターネットで調べたり、専門家の方に話を聞いたりする。

3 実践と考察

(1) ダンゴムシのことをくわしく調べて発表しよう

捕まえやすく、どこにでもいることで子どもにとって身近な存在であるダンゴムシ。しかし謎も多く、「なぜ丸くなるのか」「なぜ石の下にいるのか」と疑問が出た。「敵から身を守るためだよ」「湿ったところが好きだからだよ」など予想を立てて意見を言える子もいた。その後、実際にグループごとに飼育箱に10匹ほど飼って調査実験して



【ダンゴムシ研究レポート発表会】

みることでダンゴムシ生態の理解を深めた。図鑑やインターネットで得た情報を生かしつつ、自分たちで飼育し、実際の様子を見ることで生まれる発見や驚きを大切に

て、研究レポート発表会を開いた。情報を発信する場は、学級内だけでなく、ダンゴム

シに興味を示し校内で捕まえていた低学年の子に向けて発表する場を設定した。

①食べ物調査…ウサギと同じようにニンジンやキャベツも食べる。紙も食べる。落ち葉を与えると、葉脈だけ残してきれいに食べつくして、丸いフンをたくさんした。

「ダンゴムシは、地面のおそうじ屋さんの仕事をしているね。」

②迷路実験…触覚を働かせて、スタートからゴールまで進むことができ、賢い生き物である。

③体のつくりや動き方調査…昆虫と違う甲殻類で足は、14本あって、触覚触覚を動かして丸くなる。メスには、黄色い線が入っている。

④子の増やし方…メスのお腹の周りに白い卵がたくさんつき、数日後白い子どもがたくさん生まれた。



【低学年の子とダンゴムシレース】

(2) 岩津学区で「いきものみつけ」

校内の動植物について調べていくうちに、調査した内容から自然環境に関連づけて考えを深めていくことが難しいと感じた。そこで、「おかざき自然体験の森」で植物を観察する方法を指導員の先生から教えてもらう機会を設けた。そこで、植物の生命力の強さや動物と植物が関連していることを考えるきっかけになった。また、インターネットを使って、「いきものみつけ」のサイトを調べ、りぶらサポータークラブ・いきものみつけ隊の代表をしている杉浦仁美さんから話を聞いた。いきものみつけ手帳を使って、校内の自然観察を行った。



【杉浦さんと共に生き物みつけ】

(杉浦さんへのお礼の手紙より)

- ・生物多様性のことがよく分かりました。杉浦先生は物知りですね。飛んでいる鳥の名前をすぐ当てることにおどろきました。ぼくも野鳥について調べて、野鳥博士になりたいです。
- ・ぼくは、杉浦さんが作ってくれた岩津学区の特別の「いきものみつけ手帳」に載っていたジョロウグモをいっぱい見つけました。また、ツマグロヒョウモンは昔、岡崎にはいなくて温暖化の影響で見られるようになったことも分かり、学校の自然を調べることで自然の変化が分かり、地球を助けることにつながることも知りました。

(3) カブトムシが育つ学校にしよう

腐葉土を掘ってカブトムシの幼虫を大量に発見した。その情報は校内に広がり、数日後には1匹残らず捕られていた。手づかみ触り、狭い場所で大量に飼っている子を見て、カブトムシにとって住みやすい場所はどこかを考え、堆肥場を作り、今まで捨てていた落ち葉を集め、住みやすい場所を作る活動を行った。

4 成果

本実践を通して、「虫やミミズは気持ち悪い」「花や草には興味がない」と言っていた子も継続観察をしたことで、動植物に以前よりも愛着をもつことができ、だんだんと自分の住む環境の変化に目を向けられるようになっていった。また、専門知識の豊富な方との交流を通して、植物の生命力からわたしたち人間が学ぶことが多いことや、自然観察を継続し、比較することで生物多様性や地球温暖化につながることも知ることができた。